

1. 大学の概略

(1) 歴史

リーズ・メトロポリタン大学は、180年以上の歴史ある英国の地方大学で、複数の学校が統合されて現在に至っており、1824年設立のリーズ職工協会(Leeds Mechanics Institute)、後のリーズ科学芸術文学研究所(Leeds Institute of Science, Art and Literature)、1846年設立のリーズ芸術単科大学(Leeds College of Art)、1845年設立のリーズ商業単科大学(Leeds College of Commerce)、そして1874年設立のヨークシャー教育経済単科大学(Yorkshire College of Education & Home Economics)の4大学が1970年に統合され、リーズポリテク(Leeds Polytechnic)となった。さらに、1976年にリーズ市立訓練単科大学(The City of Leeds Training College)がこれに加わり、現在に至る。

(2) 構成

学部は、芸術・社会学部(Faculty of Arts and Society)、ヘルス学部(Faculty of Health)、ビジネス・法学部(Faculty of Business & Law)、情報技術学部(Innovation North)、カーネギー<スポーツ&教育>学部(Carnegie Faculty of Sport & Education)、およびレスリー・シルバー⁴国際学部(Leslie Silver International Faculty)の6つからなる。

【芸術・社会学部(Faculty of Arts and Society)】 <http://www.leedsmet.ac.uk/as/>

- The Leeds School of Architecture, Landscape & Design
- The Leeds School of Contemporary Art & Graphic Design
- School of the Built Environment
- School of Cultural Studies
- School of Film, Television & Performing Arts
- School of Social Sciences

【ヘルス学部(Faculty of Health)】 <http://www.leedsmet.ac.uk/health/>

- Center of Food, Nutrition and Health
- Center for Applied Psychology, Health and Culture
- Center for Health Promotion Research
- Center for Pain Research
- Center for Psychological Therapies
- Gender and Health Research

【ビジネス・法学部(Faculty of Business & Law)】 <http://www.leedsmet.ac.uk/lbs/>

- Leeds Business School
- Leeds Law School
- Leeds School of Accountancy & Financial Services

【情報技術学部(Innovation North)】 <http://www.leedsmet.ac.uk/inn/>

- Centre for Creative Technology
- Centre for Technology Enhanced Learning research
- Centre for Mobile & Converging Technologies
- Praxis Centre
- Centre for Social Innovation
- Library & Information Science Research Group

⁴初代名誉学長

【カーネギー学部(Carnegie Faculty of Sport & Education)】 <http://www.leedsmet.ac.uk/carnegie/>

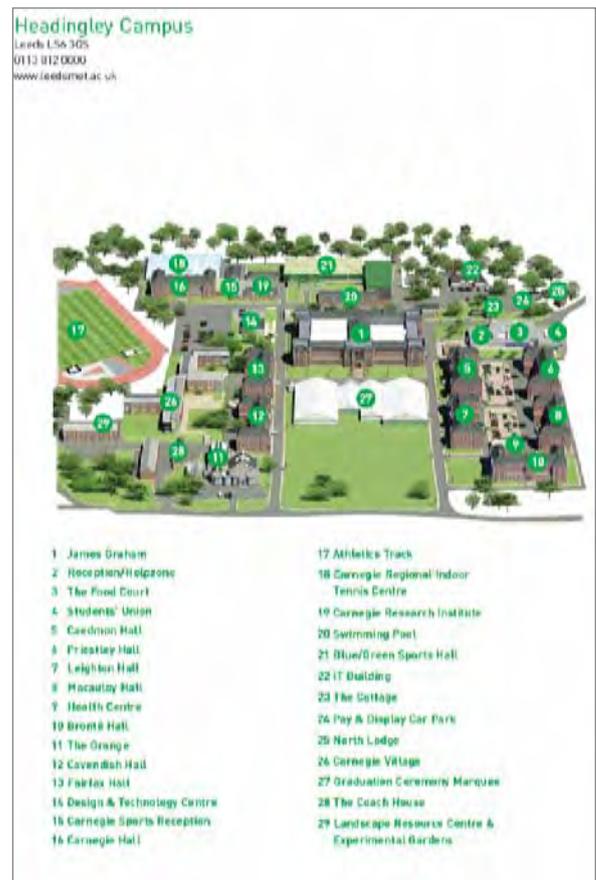
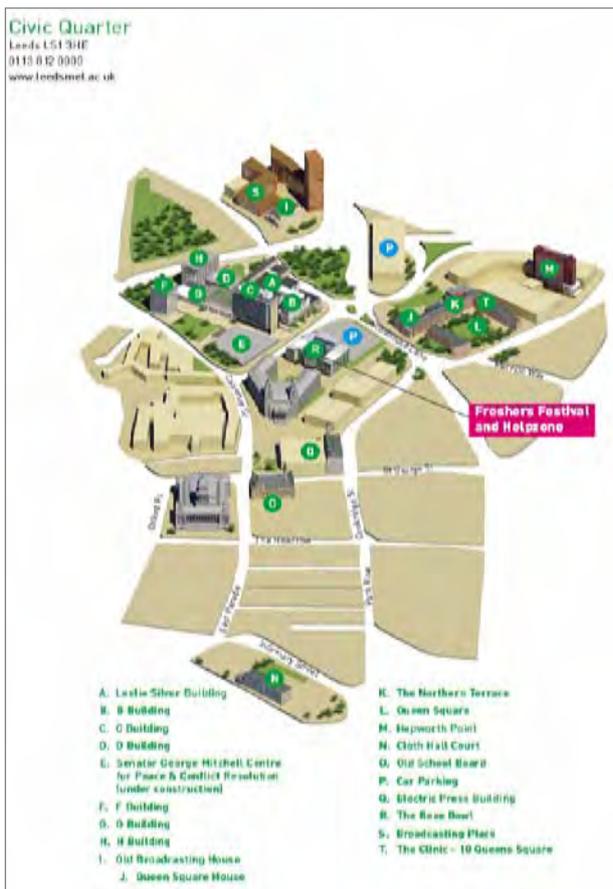
【レスリー・シルバー国際学部(Leslie Silver International Faculty)】 <http://www.leedsmet.ac.uk/international/>

(3) 学生数

リーズ・メトロポリタン大学は、およそ 3,500 人のスタッフと 52,000 人の学生からなる大規模校の一つで、さらに地域大学ネットワーク(The Regional University Network)を形成し、ヨークシャー中の 14 単科大学が加盟し、400,000 人以上の学生へ、自分の好きな場所で、自分のペースにあった教育を受ける機会を提供している。2007/8 年度の実績によると、世界 119 ヶ国から約 4,000 人の留学生が学んでおり、日本からの留学生は 44 名。

(4) キャンパス

Headingley、Harrogate および Civic Quarter の 3 箇所にキャンパスがある。



(5) 授業料

英国人・EU 学生： 学部 £2,000、大学院 £3,400 - £5,000
非 EU 学生(留学生)： 学部 £7,000 - £7,500、大学院 £7,800 - £9,600

※リーズ・メトロポリタン大学の“low-charge high-impact” ポリシーが窺える。

UCAS(英国大学学部共通の入学手続き機関:Universities and Colleges Admissions Service)によると、2009-10 年度の①英国人および EU 出身学生の年間授業料はほとんどの大学で£3,225 に設定されている。一方、留学生の授業料は②留学生(EU 以外)の平均は文系(Arts/classroom courses)£9,919、理系(Science/lab-based courses)£10,784 であり、①のほぼ 3 倍となっている。いずれにしても、リーズ・メトロポリタン大学では①②どちらについても、授業料が低めに設定されていることがわかる。

(6) 宿舎

宿舎はリーズ市内に点在しており、価格は宿舎によって異なるが、おおよそ£72.25(¥10,838/週:£1=¥150)程度である。費用には、光熱費、スポーツパス、保険、インターネット接続費が含まれており、食費およびテレビのライセンスは、別途学生の負担となる。



キャンパス内の様子

(7) その他

2008年にリーズ・メトロポリタン大学は、スポーツおよび身障者スポーツの分野で優れたコーチング教育を提供していることが評価され、UK Centre for Coaching Excellenceの表彰を受けた。またキャンパスの国際化戦略に関してAndrew Heiskell Awards⁵を獲得した。ビジネス・マネージメント、経済の分野では、英国内で上位20位に入るビジネススクールに選ばれており、また、児童研究、薬学分野での研究も名高い。技術専門学校を源としているため、継続教育や生涯教育に力を入れており、実践的なプログラムや柔軟な入学要件で多くの学生を獲得している。インターン制度を取り入れたプログラムも豊富にあり、産業界や経済人とのつながりも深く、学問としての知識を実践で適用・応用していくことができる。

2. 訪問スケジュール

- 9:00 到着後、大学紹介
- 9:15 国際開発部の活動について簡単なブリーフィング
David Braham, Director of International Development
- 9:30 留学生リクルートメントについて(プレゼンテーション 1)
Julie Park, Head of International Office
- 10:15 リーズ・メトロポリタン大学の国際化(プレゼンテーション 2)
Professor Elspeth Jones, International Dean
- 11:00 休憩、キャンパス・ツアー(カーネギー<スポーツ&教育>学部の施設見学含む)
- 12:00 昼食(大学主要スタッフとのネットワーキング・ランチ)
- 13:00 留学生入学許可に関するポリシーと方法(プレゼンテーション 3)
Christina Ingle, International Admissions Officer
- 13:30 学生の流動性の交流とボランティア
(学術的コラボレーション<ジョイント/ダブル・ディグリー>、国際化のためのスタッフ教育<SD>)
David Braham, Director of International Development
Stewart Harper, Chief Operating Officer
- 14:30 学習支援も含む学生支援について
Dawn Leggott, Principal Lecturer English Language teaching
- 15:00 訪問プログラム終了

⁵ IIE(Institute of International Education) <http://iienetwork.org/?p=26627>
が IIE ネットワークに所属する大学のうち、特に優れた大学の国際化の取組みを行っている機関に対して授与する賞。「海外留学プログラム(Study Abroad)」「キャンパスの国際化(Internationalizing the campus)」「教員の国際化(Faculty Programs)」の3部門に分かれており、リーズ・メトロポリタン大学はキャンパスの国際化部門の「国際化戦略」で受賞(Honorable Mention 2008)している。<http://www.iienetwork.org/page/117767/>

1) 留学生リクルートメントについて(プレゼンテーション1)

Julie Park, Head of International Office

- エージェントと協力し、プロジェクト・ベースでマーケットヘアプローチ
- 国際室の組織体制、運営について

International Office(国際室)

現在 14~15 名の職員で構成されているが、10 年前には職員は 4 名しかいなかった。この人数の増加が、国際化を重視しているリーズ・メトロポリタン大学の姿勢の現れであり、あらゆる側面で国際化を創造しようとしている。留学生がいることによって生み出される internationalisation を、リーズ・メトロポリタン大学のような大学で再現したいと思っている。現在、4,000 名ほどの正規留学生がキャンパスで学んでおり、その数は少しずつではあるものの、年々増加している。

国際室の主要な業務は学生確保で、10 年前には、アフリカ、ヨーロッパ、東アジア、東南アジア、南アジアに地域を分け、ブリティッシュ・カウンシルなどが主催する留学フェアに参加する等してリクルートメントを行っていたが、使用するマーケティング資料やマーケティング方法は、地域によって異なるわけではなく、すべて同じものを使用しており、また留学生に大学が与えていた情報も、英語学習サポートの情報を除いては、英国人学生と同じ内容のものであった。マーケティングのほか、国際室は、ウェブページの作成補助、留学生の資格確認、留学申請書の評価などの業務を行っている。

近年、学生側からの情報要求が増し、本学の対応方針にも変更を加えてきた。これまで地域による差異のなかったリクルート方針をやめ、日本、インド、中国など、それぞれの国によって異なる学生からの要求に応えるべく、マーケティングのターゲット国によって異なるマーケティング資料や方法を用いるようになった。

ここ 2 年間は、これまで実施してきた International Fresher's Week(留学生を対象としたオリエンテーション)をやめ、留学生も英国人学生と同時期に入学するようにしている。留学生と英国人学生とを区別なく扱うのは、留学生にとって新たな経験でもあり、またそれを実現可能とするには、必要な情報は入学前にすべて与えるという方針の徹底なくしてはありえない。そのためにも、どの国の学生がどの情報を必要としているのか、細部に分割した情報を regional manager と呼ばれる特定地域担当の職員が収集している。

マーケティング

プロジェクト・ベースのアプローチは、特定の地域に注目しマーケティングを行うのではなく、プロジェクトの性質に注目し、たとえば、インドで実施されるビジネス系のプロジェクトと同様のプロジェクトが中国でも実施されるのであれば、同じ担当者がプロジェクト・マネージャーとして両方のマーケティングを担当するという具合に、プロジェクトの資本元による分割方法によって担当者を割り振る方法である。現在ロシアで行われているプロジェクトは、2013~14 年にかけてロシアで行われるスポーツ大会(オリンピック、パラリンピックなど)に注目し、主催国として必要となる人材の育成をターゲットとしている。これは、ロシアに特化したプロジェクトではないため、ロシアでの人材育成が終われば次の開催地で同様のプロジェクトを展開していくことになり、同じプロジェクト・マネージャーが担当する。ここでのマーケティングは、各プロジェクトのニーズの探求であって、特定地域のニーズ探求ではない。

また、現在インドで行われているマーケティングは、近年のインド人留学生の増加にヒントを得たもので、留学生の出身地を調べたところ、インド全土に分散するのではなく、特定の都市に偏っていることがわかったため、それら都市に焦点を当て、その都市のニーズを調査し、マーケティングを行っている。同様のマーケティングを中国でも行っている。

以上のような新しいマーケティング手法を試みる一方で、依然としてヨーロッパでは特定地域を対象としたマーケティング活動も行っている。

これまでは、大規模な留学フェアなどに参加することがマーケティングの重要な活動だと考えてきたが、最近では、学生一人ひとりと直接つながることが重要であると感じており、学生側も、漠然とした大学説明ではなく、ターゲットに特化したアプローチを求めている。学生からのアクセスをより頻繁に行ってもらうため、ウェブサイトを各国言語で用意するなど、学生だけではなく、実際に留学費用を出す保護者用のページも用意している。現在、世界各国で 17 のエージェントを採用しているが、エージェントだけに情報源を頼るのではなく、ブリティッシュ・カウンシルをはじめとする諸機関からの情報も有効に活用している。また、海外地域の同窓会に顔を出し交流を行うことで、後輩学生の推薦等も促進している。

近年は大学の海外進出も行っており、香港およびインドにキャンパスを設けている。(インドキャンパスは 2009 年 9 月から開学予定。)海外キャンパスでも英国のキャンパスと同様の教育が受けられるようにしている。リーズ・メトロポリタン大学の教育を受けたいが経済的に英国へ来ることのできない留学生や、その他の事情によりリーズ・メトロポリタン大学へ直接来ることのできない学生を受け入れている。また、英国人学生が香港やインドキャンパスへ行くことも可能である。

2) 国際化を実現させる:世界的な規模の視野を育てるリーズ・メトロポリタン大学(プレゼンテーション2) Professor Elspeth Jones, International Dean

国際化(internationalisation)とは、教育、研究、学生サービスのあらゆる点において国際的あるいは多文化共生となることだと理解しており、国際化を進める上での核となる 10 項目を大学の未来像(vision)として戦略的に定め、中でも特に以下に記す 9 番目の vision にそのことが明記されている。

9. a university with world-wide horizons where an international, multi-cultural ethos is pervasive throughout our scholarship, curriculum, volunteering and community engagement at home and overseas (国際的あるいは多文化的精神が、奨学金やカリキュラム、ボランティア、国内外における地域貢献について浸透している世界的な大学)

この中の国内外("at home and overseas")とある部分がポイントで、通常、大学の国際化というと留学生のことばかりが取り上げられがちだが、リーズ・メトロポリタン大学では英国人学生の国際化も視野に入れた取組みを行っている。

2003 年には、国際化推進のため以下 6 つの戦略を打ち立てた。

i Internationalising learning, teaching and research (学習、教育、研究の国際化)

研究の分野での国際化は、教員と海外の研究者とのネットワークがすでに構築されているため順調に行われているが、教育の面では、いかにカリキュラムを国際化するのが大きな課題であった。留学生のみならず、英国人学生も興味を持ち、さらにグローバルに学ぶことのできるカリキュラムを提供するため、既存のカリキュラムの見直しを行った。"internationalisation"の定義も、また「カリキュラム」の定義も人によって異なるが、リーズ・メトロポリタン大学では、「カリキュラム」を教室の内外で行われる活動と定義づけ、単に授業だけではなく、いわゆる extra curriculum activity と呼ばれる範疇の活動でも"internationalisation"を目指している。"Cross-Cultural Capability & Global Perspectives Guidelines for Curriculum Review"という冊子を作成し、全教員へ配布した。これは、カリキュラムの国際化を図る上での枠組みを構築していくためのガイドラインで、FD/SD の一環でもある。昨年までの 5 年間で、このガイドラインに基づき全クラスのレビューを行い、その成果をウェブページで公開している。現在はレビューの第 2 期に入っており、大学の規則の見直しを行っている。また、"Global Citizen Awards"(地球市民賞)を設け、語学学習、留学、海外ボランティア、留学生のサポートなど、学生及びスタッフが行った活動を卒業時(学生の場合)に表彰するもので、学生やスタッフの国際化を体験する活動を推奨している。表彰は、その内容に応じてプラチナ、金、銀、銅といったランク付けがされている。

ii Enhancing the international student experience (留学生の体験をさらに充実させる)

留学生が国際的な文化的な体験活動を通じてより多文化理解を獲得させる。

iii Enhancing the international experience of home student (英国人学生の海外体験をさらに充実)

セミナー、映画ウィーク、フェスティバルなど、目に見える形での国際化イベントを数多く実施することで、より多くの学生・スタッフに国際化に触れる機会を提供してきた。また、国際ボランティア活動も促進しており、一昨年は 6 大陸 10 カ国で、15 のボランティアプロジェクトが行われている。これらボランティアに参加するための経費の半額を大学が負担した。これらの活動を支援するために、①海外提携大学の利用、②目に見える形での貢献、③"international reflection"コーナーの活用(自らが体験した国際化に関するエッセイをウェブサイトにつけたコーナーで紹介、年間最優秀作品の表彰⁶も行っている)の 3 点を重点的に取り組んでいる。

iv Developing and fostering international partnership (国際的なパートナーシップの開発と育成)

協定校と連携協力して学生のボランティア活動の機会(イベント等)を作る。

v Developing staff capability for internationalisation (職員の国際化に対応する能力開発)

vi Effectively recruiting international students (効果的な留学生のリクルート活動)

以上が、これまでリーズ・メトロポリタン大学が取り組んできた活動であり、これから大学がどの方向に進んでいくのかという、まず「国際化」(internationalisation)が特別な取組みではなく、リーズ・メトロポリタン大学の標準であるというレベルまで推進していくことが必要である。そのためにも、国際化に関与する学生数の増加、全学的取組みを徹底させるための仕組み作り、進捗状況の確認、英国人学生と留学生との協調体制の確立等、さまざまな課題が挙げられる。以下に挙げる 4 点は、今後大学が特に力を入れていく課題である。

- ① 境界を越えたカリキュラムと学生活動

⁶ <http://www.leedsmet.ac.uk/health/international/reflections/woldegebriel.htm>

- 
- ② イベントや提携大学の活用
 - ③ 世界の舞台でリーダーシップを発揮する
 - ④ あらゆる資源(知的資源・人的資源)の活用

国際化は、高等教育に変革をもたらす要因の中でも、最もパワフルなものであると信じ、これからもリーズ・メトロポリタン大学の国際化を推進していきたい。

3) 留学生入学許可に関するポリシーと方法(プレゼンテーション 3)

Christina Ingle, International Admissions Officer

International Admissions Office(入学事務室)では、正規留学生の入学申請にかかる諸手続きを行っており、現在約 3,000 人の留学生のデータを管理している。業務内容は、主に申請者が大学の入学要件を満たしているかどうか判断し、入学手続きに支障がないよう、学内での連携を図ることであるが、学内での作業を円滑に推進するため、全学への留学システムの周知や、必要に応じて講習を行っている。また、大学入学に必要な英語力の取り扱い、他大学の留学生情報の分析や、それら分析に基づく基準作成なども行うと同時に、留学生への奨学金システムの管理・運営も担っている。

留学生の受入れに関する入学事務室の業務は、次の手順で行われる。

1. 留学に関する問合せの管理(留学生が最初にコンタクトする部署)
2. 留学生からの申請書の受付
3. 留学生への、申請書受理の案内
4. 学生レコードの作成
5. 留学生の成績評価
6. 英語力を判断するスコアの確認
7. 留学を希望する学部へ、入学事務室からのコメントを添付した申請書を転送

基本的には、海外エージェントと連携して業務を行っているが、学生からの問い合わせはすべて入学事務室で対応しており、エージェントを経由した学生であっても、連絡先などの情報すべてを把握・管理している。また、学生レコードは学生が卒業するまで、成績等を管理していくことになる。

留学生の成績評価に関しては、評価基準を策定しているUKNARIC⁷、CEP⁸、UCAS⁹、ブリティッシュ・カウンシル(BC)等の団体の情報を活用し、また入学資格の判定や、書類の詐称等もチェックしている。

英語力の評価基準は、基本的には IELTS を用いているが、近年では TOEFL スコアも利用している(IELTS 6.0, TOEFL iBT79, TOEFL CBT 213, TOEFL ITP 550)。また、その国独自の評価基準がある場合は、それを参考とすることもある。英語力の評価基準についてはリストにまとめると同時に、これを公表している。

学部への情報提供に関しては、各学部には留学生担当者を置き、入学希望の留学生へ担当者としてコンタクト・アドレスを周知している。

今後の課題としては、イントラを利用した全職員がアクセスできる成績参照システムの構築と、留学希望者にかかる手続きを本オフィスで一括処理できるような業務集約を目指している。

4) Q&A セッション;

学術提携 –ジョイント/ダブル・ディグリー、国際化のためのスタッフ教育(SD)–

David Braham, Director of International Development

Stewart Harper, Chief Operating Officer

⁷ UKNARIC は世界 180 カ国以上の職業・学術・専門的スキルや資格に関する情報やアドバイス、専門性の高い意見を英国政府の代理として提供している国の機関(National Agency)。 <http://www.naric.org.uk/>

⁸ Centre for Economic Performance の略。ESRC(経済社会リサーチ・カウンシル)によって 1990 年にロンドン大学(LSE)内の研究機関として設立され、教育とスキルを含むプログラムでは、教育やスキルの獲得が与える経済効果へのインパクトについて研究。さまざまな経済動向の決定要因を探っている。 <http://cep.lse.ac.uk/new/about/default.asp>

⁹ UCAS とは、英国大学学部共通の入学手続き機関(Universities and Colleges Admissions Service の略) <http://wwwucas.ac.uk/>



Q1. なぜ海外校(香港、インド)を運営しているのか。

A1. 大学としての世界規模の国際化(world-wide horizon)推進のためと、②近年の世界経済不況から試算される、これから20年間の世界経済の動向を鑑みて、留学したいけれども金銭的な問題で、英国まで留学できない学生が出てくるだろうということで、英国まで行く必要がなく、香港あるいはインドで、本校と同様の教育が受けられる機会を設けた。

Q2. この9月からインド校(Bhopal校)を開学するにあたっての、もっとも難しいチャレンジは。

A2. ①経済的に持続可能であることと、②インド校で学んでいる学生に、リーズ・メトロポリタン大学で履修できるプログラムと同じ質を提供すること、またリーズ・メトロポリタン大学で受けられるサービスと同じ内容のサービス(図書館、IT、スポーツ施設など)を提供すること。

Q3. 今回の海外校新規開設にともない、SD(staff development)などはないのか。

A3. 3分の1の教員は本校から送られるため、実際に赴任することになる教員には異文化体験というSDの機会になる。

Q4. インド校開校を受けて、リーズ・メトロポリタン大学の英国人学生は何か利益を得るのか。

A4. インド校で教える教員の3分の1は本校から派遣されるため、英国人学生ではない学生に教えた経験をもった教員が、再度英国キャンパスに戻ってきて英国人学生に教える際に、海外での経験を活かした何らかのポジティブな変化をもたらすことが期待できる。また、インド校と英国校でのe-learning授業の可能性も模索している。インド校の学生が、数ヶ月あるいは1年ほど英国校で学ぶこともあると思うので、英国校の国際化にも資することになる。

5) リーズ・メトロポリタン大学生の流動性

David Braham, Director of International Development
Stewart Harper, Chief Operating Officer

2008年から2012年における国際化戦略のなかで、学生の流動性を現在の4倍まで増加させるとうたっているように、リーズ・メトロポリタン大学は国際化に非常に重点を置いている大学である。

学生の流動には、以下4パターンが挙げられる。

1. ヨーロッパ諸国の提携校とのエラスムス計画 (EU諸国における教育・文化プログラムの一つで、大学レベルでの人物交流の促進を図る計画。1987年創設)による交換留学
2. スポーツ・文化などに関した提携機関との交流
 - 1) IIFA (International Indian Film Academy)
 - 2) British Asian Rugby Association
 - 3) Yorkshire County Cricket Club
 - 4) Opera North
 - 5) Commonwealth Games Organising Committee, etc.
3. ボランティアによる学生交流
4. 英国キャンパスでの交流活動

エラスムス計画による交流は、現在90人の交換留学を行っており、ほかに、ヨーロッパ圏外の提携大学との交流も、29機関と行っている。但し、そのほとんどはアメリカおよびオーストラリアの英語圏の大学で、他にはカナダ、ニュージーランド、および日本に各1校ずつ提携校がある。日本の提携校は広島大学で、これまで17年間の交流を続けてきている。今年度、メキシコの大学との協定が成立し、また、現在エクアドルの大学との協定締結に向けた準備を行っている。

学生の交換留学を行うにあたって、もっとも重要なのが言語の問題で、英国人学生は外国語での授業を受けたがらないので、英語で授業を受けられる提携機関への交換留学が多くなっている。また、留学地での安全面、留学先大学で取得した単位互換などの問題もある。

ボランティアによる交流は、外部資金の導入、提携機関からのサポートを受け、学生にかかる費用の半額は基金により賄い、半額は参加する学生本人が負担する。昨年度も、ブリティッシュ・カウンシルの助成金によりインドへ62名の学生を送ったが、今年度もPMI2プロジェクトとしてブリティッシュ・カウンシルから助成金がつき、この秋も10名の学生をインドへ派遣することになった。

英国キャンパスでの交流活動は、難民の相談相手、読書サポート、資金調達、その他55名の学生と179名のスタッフによるさまざまな企画を実施している。

今後の課題としては、なかなか海外へ足を運ばない性向にある英国人学生を、いろいろな方面で勇気付けながら、できるだけ海外へ送り出したいと考えており、またカリキュラムの一部としてボランティアを位置づけていくこと、そして世界的景気後退の流れの中で、新たな経済対策を模索していくことなどが挙げられる。

6) 学習支援を含む学生支援について

Dawn Leggott, Principal Lecturer English Language teaching

リーズ・メトロポリタン大学の国際化戦略における教職員の国際化対応能力の向上および教職員間のネットワーク構築のため、また留学生のサポート体制を構築するために、以下2つのウェブサイトを新たに立ち上げた。

“Bridges”

リーズ・メトロポリタン大学の教職員が利用できる、教職員の国際化の涵養のためのオンライン・システム。Ningというソフトウェアを使用して作成したウェブページで、教職員の大学メールアドレスをパスワードとして登録している。この9月から運用開始予定。まだ運用を開始していないが、現在約40名の教職員が登録を済ませており、新たに参加したい教職員は登録手続きを取る必要がある。

国際化を推進しているのはある特定の学部ではなく、全学を通じて行っているものであるが、それぞれの学部で話し合われていることは意外に同じような内容である。但し、学部の異なる教職員間での情報共有がないため、お互いにどのような状況となっているのか理解していなかった。

国際化に関する各種イベント情報(キャンパス内外、国内外を問わない)を、このウェブページにアクセスできる教職員が各自アップデートすることができるほか、オンライン・フォーラムでは、教職員がオンライン上でのディスカッションや、SDセミナーを行うことができる。また、大学の国際化戦略をはじめとする公表資料の提供や用語の解説、講演資料等学習資料、問い合わせなど職員が自主的に学習できる環境を提供している。

“The English Campus”

入学前の留学生を対象としたウェブページ。入学前に必要な情報を提供するほか、英語学習など事前学習教材を提供する。このウェブページも、2009年9月から運用開始予定。

現在留学中の学生のインタビュー(2分)を載せることで、学生の生の声を伝えている。インタビューの内容は、学内行事、授業、異文化体験など多岐にわたる。また、英語学習や英国文化についての情報、リーディング、ライティング、学習能力など、留学してから必要になる情報等を、事前に講習できるページもある。

大学に関する情報は、大学のウェブページにリンクを張っているものもある。また、入学前に入学してからの学生自身のスケジュール管理サポートのため、条件を設定してシミュレーションを組む機能もある。

オンライン・チュートリアル・システムでは、英語クラスを受講している留学生全員がアクセスできるようになっており、担当教員が学生からの質問に答える。

Student caféでは、学生同士が質疑応答をすることができ、たとえば留学中のアパートはどの辺で探せばよいのかなど、学生の視点からみた情報の交換ができる。また、タイピングの代わりに、対話でディスカッションに加わることも可能である。

Web Conference Systemを利用し、ライブレクチャーを行うことも計画している。このシステムでは、最大6名がアクセスできる。

3. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み

- 大学教育のカリキュラムに国際化を取り入れるために、全学的取り組みとして全授業計画に国際化要素を条件に立案するようになっている。
- 大学の正課外において自国の学生や地域と交流するためにボランティア活動を取り入れており、実績を積むことで学生を表彰する制度(Global Student Award)を設けてモチベーションを高める工夫をしている。
- 入学前の留学生のために登録制のウェブによるコミュニケーション・ツール“The English Campus”を運用することによって、入学前の準備や事前の知識を得て入学前の留学生の不安を取り除き、円滑に入学後の学生生活に導入することができる。特に先輩の留学生の1分間ビデオを提供しており大きな効果があると思われる。
- 大学の教員及び職員のためのウェブによるコミュニケーション・ツール“Bridges”を運用することによって、国際感覚や国際化に必要な知識を共有できるようになっている。
- 留学生の獲得に関して、Project-based approach や地域に特化したニーズによるマーケティングを行うなど、多様な手法を試みている。

4. 報告者所感

● 大学のイメージづくりについて

今回訪問した大学はどの大学もそうであるが、特に大学のロゴ、スクールカラー、戦略（スローガン）について、スタッフが統一的に使用しているように見受けられた。特に、リーズ・メトロポリタン大学のロゴ（人型の組み合わせによるバラ）とスクールカラー（紫）は、訪問した大学のなかでもとりわけ強く印象に残った。これも大学の戦略の一つであると感じた。



大学の国際化戦略について

大学の国際化を進めるにあたり、戦略の柱を作り、それに基づく実践を行っているところは、日本でも大学の中期目標・中期計画にあたると思われるが、その柱立てのキーワードを大学の構成員によって浸透させるよう実践が行われているために、とても論理的な説明となっていた。特に参考になったのは、大学の国際化が自国の学生の国際化に貢献するためであるということ、これはまさに日本にも置き換えられ、留学生30万人計画が日本人学生の国際化のためでもあるという認識を強く持つことができた。

カリキュラムの国際化について

戦略の柱として、カリキュラムのなかに国際化の要素を求める方針を明確にしていた。

学生が国際化の一環で様々な体験をすることができるよう、専攻科目、語学のほかに、ボランティア活動にも参加できるよう、整備されていた。また、大学がボランティア活動を企画してイベントを実施し、参加した学生に認定書を出すというインセンティブを与えるやり方が斬新に思えた。日本の学生にも、よりインセンティブを与えるため導入しても良いと思った。

International Office (国際室)について

- 職員の仕事が region/countries のほかにも project-base である等、多様であること、留学後のケア、同窓会 alumni を活用することを通して、更なるビジネス・チャンスを獲得していることを知り、日本の大学はみすみすチャンスを逃しているのではないかと思った。今後の同窓会サポートなどを考える上で、参考になる。
- また、入学事務局が qualification (資格) に関する明確な基準(相関リスト)を持つために、他国の教育システム、学業成績について分析し、精通しており、日本の大学も今後「相手を知る」努力をする必要性を感じた。
- “The Bridges”(国際化に携わる教職員のためのウェブ)は、一大学だけではなく、今回の視察に参加した13大学間で立ち上げたいほどで、今後も大学を越えた情報交換をしていきたいと思う。

留学生及びスタッフへのサポートについて

- 英語教員による2つのITプログラム(“The English Campus”と“The Bridges”)に、ITを通じた人とのコミュニケーションの必要性・重要性を感じることができ、大変良いと思った。
- 職員用の“The Bridges”は、国際化に携わる職員のコミュニケーション・ツールとして、横断的なつながりを醸成できて良いと思う。留学生用の“The English Campus”は、事前情報の受け渡し機能として、渡英前の事前学習ナビなど、留学生が安心して留学生活を送ることができるよう配慮されていることが素晴らしい。また、在校生の実体験情報などをうまく取り入れ、学生の視点から見ても身近に感じられるウェブになっており、受入支援に必要なワンストップ・サービスや留学相談、生活相談などでも活用できるように感じた。
- 職員に対しても国際化を促す人材育成のサポート体制があることに驚いたが、国際化という分野は素養として持っていて、日に日に進歩するという点からも、継続して人材育成することが必要であると受け止めた。
- このような開発には、経費と大学としてのサポート体制が継続的に必要であると思われるが、そこに経費や人件費を投入できるのは、やはり国際戦略がその大学において認知され、重要視されていることの現れであると感じた。



「大学の国際化」カリスマ的存在 Dr Elspeth Jones



キャンパスの趣ある建物



インド校のキャンパス構想を説明するスタッフ

1. ブリティッシュ・カウンシルの概略

ブリティッシュ・カウンシルは英国の公的な国際文化交流機関として、世界 100 カ国以上で、アーツ(Arts)、サイエンス (Science)、教育(Education)、英国留学(Study in the UK)、英語コース(English Courses)、試験(Examinations)等の分野におけるさまざまな活動を通じて、知識やアイデアを共有できるよう世界中の人々をサポートし、英国とその他世界の国々との架け橋となり、信頼と理解を築くことでより安定した社会の実現を目指している。こうして築かれた信頼と理解に基づく長期的な関係から、英国と世界の国々は恩恵をうけることになるとの信念のもと、日々活動に従事している。<http://www.britishcouncil.org/new/about-us/>

ブリティッシュ・カウンシルは 1934 年に英国政府により創立され、1940 年に王立憲章(Royal Charter)により法人組織化された。総裁はエリザベス II 世女王陛下、副総裁は英国皇太子殿下。

英国では公益団体(非営利組織)として登録され、無所属(特定の省庁の直下に属さない)公的行政機関として運営されている。(無所属公的機関とは、政府から独立した団体であるにも関わらず、大臣がその最終責任を負っている公的機関をいう。)ブリティッシュ・カウンシルは英国政府より助成金を受け、その目的を達成するために活動している。無所属公的機関の多くはそれぞれの後援省庁から支援を受けており、ブリティッシュ・カウンシルの後援省庁は英国外務省である。

沿革

ブリティッシュ・カウンシルの歩み

- | | |
|-------|--|
| 1934年 | 英国政府により創立される。 |
| 1940年 | 英国国王ジョージ6世のもと、王立憲章(Royal Charter)により法人組織になる。 |

活動概要

日本では東京、大阪にセンターを開設。英国留学情報の提供、効果的な英語教授法・学習法の普及、最新の英国文化紹介(芸術全般、科学技術、社会科学を含む)の3分野で活動を展開している。また、日英交流に関わるイベントの開催、共催、後援等も広く行っている。詳細情報はウェブサイトを参照のこと。

<http://www.britishcouncil.org/jp/japan-about-us.htm>

2. 訪問スケジュール

今回、高等教育および英国留学に関する活動の中核機能をもつマンチェスターオフィスを訪れ、英国政府主導による留学生支援政策 Prime Minister's Initiative (PMI) および PMI2、英国教育のマーケティング、「Education UK」ブランドやパートナーシップについて、当該部門担当者2名からブリーフィングを受けた。

1) 17:00-17:50: Pat Killingley, Director Higher Education and Education UK

- ①英国政府主導による留学生支援政策(PMI)について
- PMI とは(その背景と、現在展開中の PMI2 戦略での目標)
 - PMI2 の戦略的パートナーシップについて
- ②ナショナル・ブランド「Education UK」について

2) 17:50-18:15: Peter Shelley, Business Development Manager, Education UK Partnership

- ③「Education UK」パートナーシップについて
- 英国大学へのブリティッシュ・カウンシルによる総合的なマーケティング支援(戦略的プライオリティー、同パートナーシップの目的、留学生マーケットの情報提供等)
 - ブリティッシュ・カウンシル ローカル・オフィスの役割、マンチェスター・オフィスによる英国大学へのマーケティング活動支援
 - ブリティッシュ・カウンシルが英国大学を対象に実施する研修機会の提供

3) 18:15-18:30: 質疑応答



3. ブリーフィング骨子

① 英国政府主導による留学生支援政策 (PMI) について

日本では「留学生 30 万人計画」が推進され、海外の留学生獲得のための取り組みについて関心が高まっているが、英国は 1999 年にトニー・ブレア前首相が留学生支援政策 (**Prime Minister's Initiative**) 第一期 を発表して以来、ブリティッシュ・カウンシル、高等教育機関、そしてその他関連機関が中心となって積極的に留学生受入体制を整備した結果、留学生受入政策が展開されてから 2007 年までに高等教育機関で学ぶ留学生は 68% 増加、現在約 39 万人に上っている。

留学生受入政策である PMI は政府、教育機関、世界規模のネットワークをもつ文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルが連携した世界初の留学プロモーションの取り組みとして高い関心を集めた。

- 1) 英国留学のナショナル・ブランド「Education UK」の確立。
- 2) 留学生受入環境の整備 (入国ビザ手続きの効率化、就労機会の拡大等)
- 3) ブリティッシュ・カウンシルと英国教育機関連携の強化

上記のような主な取組みにより、英国教育機関とブリティッシュ・カウンシルが協力して世界レベルの留学プロモーション活動を展開することが可能になった。

現在、PMI の成功をベースに、PMI2 が展開されている。今回の英国大学視察訪問も PMI2 の予算で運営されているが、PMI2 とは何なのか？

PMI2 とは、英国のトニー・ブレア前首相が 2006 年 4 月に発表した、英国政府主導による**第二期留学生支援政策 (Prime Minister's Initiative for International Education (PMI2, 2006-2011))** の略称である。国際教育市場における英国を支援するため、以下のような政策パッケージを発表、2006～8 年の 2 年間で 2,700 万ポンドもの拠出を行った。

- 英国政府主導 第二期留学生支援政策 Prime Minister's Initiative for International Education (PMI2)
- 英－印 教育・研究政策構想
- 英－アフリカ パートナシップ政策構想
- 英－ロシア パートナシップス (BRIDGE)
- 英－中国 奨学金および他 パートナシップス

PMI (第一期) の成功を基盤とし、リーダーとして、英国留学の世界的なポジションをさらに確固たるものにするために、PMI2 が発表された。関連機関が効果的に連携し、協同でプロモーション活動することの重要性が立証され、引き続き同種の国家的キャンペーンが展開されている。

PMI2 で達成されるべき目標とは？

- 英国の高等教育で学ぶ外国人学生数を今より 7 万人増やし、継続教育では 3 万人増やすこと。
- 英国に年間 1 万人以上の学生を送り出す国を倍増させること。
- 英国での学生の満足度評価を大きく改善すること。
- 英国と他国との連携プロジェクトの数を大幅に増やすこと。

現在、グローバルな教育市場は刻々と変化しており、英国が現在の強固なポジションを維持できる保証はない。昨今の経済不況が及ぼす世界の〈教育〉マーケットの変化を反映して、より戦略的にグローバルな観点から実施・運営される必要があり、英国を留学先に選ぶ外国人学生数を引き続き増やす従来の「優先課題」の他、諸外国とのパートナーシップの構築など、留学生の獲得とは別の目的をもった活動に一層重点が置かれているのが PMI2 の特徴といえる。

また、留学マーケットについて考える際、ライバル国として EU 諸国の台頭、マレーシア・シンガポール、中国のアジア地域内ハブ化 (中国には 14 万人もの留学生がいる)、さまざまな教育提供方法、自国内での教育機会提供の拡がり、豪州・米国・その他の国々による活発なマーケティング活動、出入国政策等が、影響を与えている要素として無視できない。英国のリーダーとしてのポジション確保と英国の国際教育の発展を持続的なものにするべく、PMI2 では、互いに密接に関連した 3 つの項目が鍵になる。

1) マーケティング・コミュニケーション戦略

留学生は大学を選ぶ前にまず留学する国を選択する場合がほとんどであるという。英国留学のナショナル・ブランド「Education UK」のもと、世界的な〈教育〉のリーダーとして英国を位置づける。

2) 学生の留学経験の「質」向上戦略

ベンチ・マーキングや優良事例を示すことによって、留学生活、留学経験の質向上を図る、(査証・就労問題に関して)政府と協同して留学生にとってより改善された環境を提供する等。

3) 戦略的なパートナーシップとアライアンス戦略

英国を「国際的に望ましいパートナー」国として位置づけるためのメカニズムとして「Education UK」ブランドを発展させる。また、世界的な〈教育〉マーケットにおける英国のポジションは、海外との強力な戦略的パートナーシップにますます左右されるようになってきている。PMI2 で決定された戦略的連携・パートナーシップの側面を通じ、英国は特定国の政府、教育機関、産業界と協力し、協力関係やパートナーシップの再構築に取り組んでいる。2008年東京で開催された東アジア地区の Policy Dialogue でも、域内の政府・大学・その他ステークホルダーが参加。

PMI2 のキー・プレイヤーは？

2006年度の PMI2 予算として、およそ 700 万ポンドが拠出され、政府・ブリティッシュ・カウンシル・高等教育機関、英語学校のプロモーション活動を後押しした。PMI2 の運営にあたっているのはブリティッシュ・カウンシルだけではなく、イングラウンド政府(ビジネス・イノベーション省< BIS >)、UK Visas、スコットランド・ウェールズ・北アイルランドの権限委譲議会、HEFCE(イングランド教育財政カウンシル)、Universities UK(英国大学協会)等のパートナー機関が協同で政策の実現を図っている。

PMI2 がもたらす成果とは？

- 教育・トレーニングにおけるリーダーとしての英国のポジションの確立と国際的な競争への予防措置
- 英国および教育セクターへの経済的恩恵
- 長期的な支持者からなる戦略的なネットワーク形成を通じた海外での英国の影響力
- 英国が創造的(creative)かつ革新的な(innovative)社会であるという認識と評価の、PMI対象優先国¹⁰のターゲット・グループ間での浸透
- 英国の研究・教育能力の維持

②ナショナル・ブランド「Education UK」について

2000年にスタートした「Education UK」ブランドは、Education UK に関係するありとあらゆる情報を網羅し一元管理するもので、情報を伝達する際の基本的な方針やメッセージを構築している。2006年にはリ・ブランディングが行われ、それまで以上に一貫性のあるブランド・メッセージを世界中に発信するようになった。リ・ブランディングの実践により、英国〈教育〉のコンセプトが明確となり、発信する情報のクオリティが高まった。

グローバル/マルチマーケット キャンペーン

ブランド・メッセージのエッセンスをきちんと伝えるため、Education UK のコミュニケーションとマーケティング活動は以下のキャンペーン・テーマにフォーカスしながら展開されている。それぞれのテーマは Education UK ブランドと整合性があり、留学生が留学先を決定する際に影響を及ぼす重要な要素になっている。

■employability 雇用の可能性

一雇用者が英国で得た教育と資格を有するとみなす価値、またこれにより学生にもたらされる就業機会。

■innovation イノベーション

一指導と学習に対する独創的なアプローチ、新しい考えを開発し採用する意欲、卓越した研究に向けての熱心な取り組み。

■language 言語

一世界的に〈教育〉のマーケットが拡大する中で、現在も多くの学生が英国を英語の本場として、また英語の学習・向上の場として重視している。

■value 価値

一品質・投資に対するメリットを明確化、キャリア UP へつながること、カルチャー、さらに人格形成へとつながる経験の場を提供することなど、英国の〈教育〉が持つ立体的な価値の醸成。

¹⁰ 「オーストラリア」「バングラデシュ」「ブラジル」「カナダ」「中国(香港、台湾を含む)」「ガーナ」「ペルシア湾岸諸国」「インド」「インドネシア」「日本」「韓国」「マレーシア」「メキシコ」「ナイジェリア」「パキスタン」「ロシア」「シンガポール」「スリランカ」「タイ」「トルコ」「米国」「ベトナム」

マルチマーケット向けと各国別のキャンペーンの継続的なプログラムが開発され、PMI2 のマーケティング活動の一環として展開されている。キャンペーン¹¹は、〈雇用の可能性〉〈イノベーション〉〈言語〉〈価値〉というテーマに加え、各教育部門を網羅するようデザインされている。

③「Education UK」パートナーシップについて

「Education UK」パートナーシップとは、ブリティッシュ・カウンシルと英国の教育提供機関の強みを補完的に統合する、国家的な会員制組織である。会費は留學生の数によって決められており、1)コア 2)カントリー・パートナーシップという2つの会員レベルが存在する。現在、298のメンバー(会員)がいるが、そのうち高等教育機関は141(全体の47%)にのぼる。

「Education UK」パートナーシップは18の重要マーケット¹²に重点を置いている。

会員には、教育市況情報を提供している。

- マーケットの紹介
- 留學生のデータ(高等教育機関への留學生数、進学先、選択したコース等、學生の意思決定にかかわるデータ: 留学希望国等)
- テーラーメイドタイプのリサーチ(寄宿学校のマーケット調査、マレーシアにおけるTNE<国境を超えた教育>等)

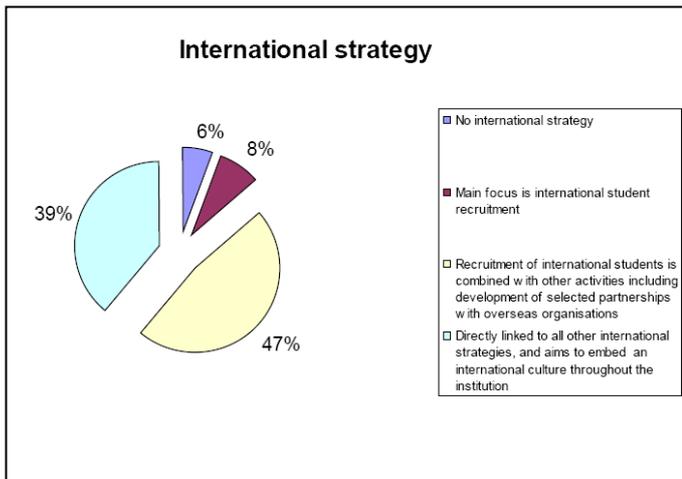
また、会員は全世界60を超える、留学フェアやその他のイベント開催に関しても会員特典を受けることができる。(会員が海外で學生との面接や同窓会イベントを行う際の協力等)

会員向け研修の機会として、①国際戦略の策定 ②国際マーケットのためのプランニング ③プランの展開、改善、施行について、International Marketing Programme(The Chartered Institute of Marketingが運営)の一部をブリティッシュ・カウンシルのマンチェスターで実施、提供している。また、「効果的な国際マーケティング・プランの展開と施行」「留学エージェントとの効果的な協同」「e-marketing」をテーマに一日研修も実施している。

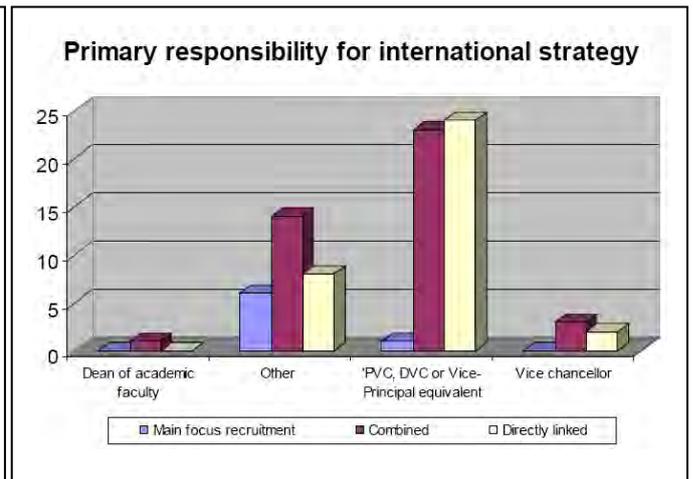
現在、新プロダクトとして、寄宿学校(ボーディング・スクール)へのサービスや、共同的な取組みへの支援、国際化指標(Internationalisation Index)がある。

会員からのデータに基づいて見ても、英国の高等教育機関(大学)にとって、国際戦略は大変重要な意味をもち、留學生獲得と結びつき、海外の大学とパートナーシップを構築しているパターン、および他の国際的な戦略にリンクされ、全学的に「国際的文化」が埋め込まれているパターンが実に全体の86%を占めている。(スライド1)国際的なパートナーシップを有する大学は全体の98%を示しており、海外とのパートナーシップ構築への関心の高さが窺える。

また、大学における国際戦略の決定権は、副学長が握っているケースが多いことが図からわかる。(スライド2)



(スライド 1)



(スライド 2)

¹¹事例を挙げると「英語力向上キャンペーン(Let your English grow)」は言語をテーマにしたマルチマーケット向けのキャンペーンであり、「ザ・チャレンジ(The Challenge)」は「雇用の可能性」〈価値〉〈イノベーション〉といったテーマを支える、世界規模での課題中心型コンテストである。また International Student Awards(国際学生賞)は、すでに英国で勉強している學生を対象とし、〈価値〉を重要なテーマとしている。

¹² Brazil, China, Hong Kong, India, Indonesia, Japan, Korea, Malaysia, Mexico, Nigeria, Pakistan, Russia, Singapore, Thailand, Turkey, United Arab Emirates, USA, Vietnam

4. 報告者所感

今回の英国大学訪問の最後(17:00~18:30)のセッションでこのブリーフィングを聞いた。大学のケース・スタディをこれまで各大学でプレゼンを受けたように考えると、ちょうど知識(見聞したこと)の確認の場となったように思う。

英国の政府が PMI/PMI2 というかたちで、多額の財政支援を施し、英国の留学生マーケットの成長を促し、結果的に2000~2007年で68%増という目に見えるかたちで成果を表していることは大変興味深かった。やはり、一貫した、かつ長期にわたる政府のてこ入れが市場の成長には必要ではないか、そう考えさせられた。

昨今の調査で、英国に留学する学生数について、韓国・中国は増加傾向にあるにもかかわらず、日本からの留学生数は減少傾向にあるという記述を目にしたが、両国とも、政府が先頭にたつて大学生の国際化を支援しているように思う。韓国・中国の大学において、英語による授業を行う academic staff に対してサラリー上乘せ等のインセンティブを与えたり、留学生数を増やすための奨学金を設立したり、とその一貫した政策が功を奏している。

わが国の政府が支援する「国際化拠点整備事業(グローバル30)」によって、状況が好転することを望んでやまない。



ブリティッシュ・カウンシル マンチェスター・オフィスにて
24 July 2009



おわりに

「苦しく、楽しく、辛かった 5 日間でした」

デ・ブリーフィングで視察訪問参加者の一人がもらした一言に、まさに私たちの 5 日間の感想が凝縮されていたように思われます。天候には概ね恵まれていたものの、南はサセックスから北はリーズ/マンチェスターまで、しかも朝早くから夜遅くかけてコーチによる移動、その上ホスト大学での分刻みのプログラムという超過密スケジュールにも拘わらず、視察メンバー全員が最後まで熱心にプレゼンテーションに耳を傾け、情報をうけとめるだけでなく、積極的に質問をすることで英国側ともさまざまな意見交換をしておられました。「素晴らしい視察団でしたね」とホスト頂いた英国の大学からも感想を頂いたほどです。

今回ご参加頂いた皆様には、業務で多忙な中、移動も含めると 1 週間以上も業務を離れ視察にご参加頂き、おそらく帰国後対処しなくてはならない業務はどれほど膨大な量であったかと推察致しますが、それにも拘わらず、帰国後 1 カ月以内にこの視察訪問報告書を作成して下さるなど、多大なるご協力を頂きました。報告書作成については、自らの視察訪問を振り返る良い機会であり、「残念ながら参加できなかった同僚や他大学の同じ国際課業務に携わる方々の参考に少しでもなれば」という思いから、報告書を分担して作成することにご快諾頂きました。改めて、ご協力頂いた参加者の皆様に心より感謝の意を表したいと思います。

また、最後になりましたが、この度の視察訪問に際し、訪問を受け入れて下さった University of Sussex, SOAS, Aston University, The University of Nottingham, Leeds Metropolitan University のホスト 5 大学、そして貴重なブリーフィング・セッションをご提供頂いた日本学術振興会 (JSPS) ロンドン研究連絡センターの古川佑子センター長に心よりお礼を申し上げます。

今回の訪問をベースに、さらに充実した内容で「第 2 回英国大学視察訪問」をご提案できるよう、英国の大学が取り組んでいる「国際化」の最前線について見聞する機会を再び皆様にお届けしたいと考えております。「第 2 回英国大学視察訪問」あるいは「第 2 回英国大学視察訪問報告書」でまたお会いしましょう。

ブリティッシュ・カウンシル
教育プロモーション & パートナーシップ チーム

第1回 英国大学視察訪問 参加者リスト

参加者リスト（所属機関名アルファベット順、敬称略）				視察報告書の担当大学・機関
1	大倉 祐佳	公立大学法人 国際教養大学	企画課地域交流チームリーダー	Leeds Metropolitan University
2	松浦 佳身	同志社大学	同志社大学 国際連携推進機構 日本語・日本文化教育センター 国際教育課長	SOAS
3	ルース・バージン	愛媛大学	国際連携推進機構 准教授	Aston University
4	小林 恵子	岐阜大学	学術情報部 国際企画課 国際企画係長	The University of Nottingham
5	谷口 雅基	高知大学	高知大学教育学部 教授 高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門 兼務教員	University of Sussex
6	梶原 健司	九州大学	教育国際化推進室 室員	The University of Nottingham
7	水野 満	名古屋工業大学	研究支援チーム 国際企画担当マネージャー	JSPS London
8	原田 美樹	岡山大学	学務部 国際課 主査(課長補佐)	Leeds Metropolitan University
9	田浦 秀幸	公立大学法人 大坂府立大学	副国際交流センター長	SOAS
10	三井 明美	立命館大学	国際教育課 職員	University of Sussex
11	杉山 修	芝浦工業大学	国際交流課 課長	University of Sussex
12	幸野 友子	国立大学法人 琉球大学	専門職員(国際教育担当)	Aston University
13	長塚 博道	早稲田大学	国際部事務部長	Aston University
14	織田 雄一	社団法人 国立大学協会 (JANU)	総務部副部長(兼企画部副部長)	The University of Nottingham
15	青山 智恵	ブリティッシュ・カウンシル	教育プロジェクト・マネージャー	British Council